



大島 康裕 東京工業大学大学院理工学研究科化学専攻 教授
(前 光分子科学研究領域 教授)

10年ひと昔

おおしま やすひろ

1984年東京大学理学部化学科卒業、1988年東京大学大学院理学系研究科化学専攻博士課程退学（博士（理学））、東京大学教養学部基礎科学科第一助手、京都大学大学院理学研究科化学専攻助教授を経て、2004年9月分子科学研究所電子構造研究系教授（2007年、組織変更により光分子科学研究領域教授）、2014年9月より現職。

着任してからまさに満10年目となった2014年の9月をもって、分子研から転出しました。着任の際にお世話になった（ご迷惑を掛けた）茅元所長、力強いサポートを頂いた中村元所長ならびに大峯所長、さらに、様々な面で大変にお世話になった研究所の皆さんに、心より御礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

時の経つのは早いというか、研究のスピードがのろいというべきでしょうか、採用時の面接の際に述べた研究計画が、ようやく実現されつつあるという状況です。「これから」という時に分子研を離れるのは、若干（ですが）忸怩たる思いです。「これから」だからこそ、新しい場所で研究を展開していきたいという気持ちでもあります。そもそも、分子研以前には、特段、自分ならではの「芸」がある研究者とは言えなかったものを、10年後にして何とか、オリジナリティのある研究を進めていけるようになりました。これは、ひとえに「分野を先導するオリジナリティの追及」を最重要視する分子研の「文化（カルチャー）」のおかげです。物心ともに恵まれた環境（大峯所長おっしゃる所の「パラダイス」）で伸

び伸びと研究三昧の生活を送ることを通じて、研究者として育てて頂いたと思っています。しかし、私にとっては「楽園」を離れる時期（とき）がきたようです。

久しぶりに大学に戻りましたが、まだ授業も受け持つてはならず、研究室には私だけです。今のところ学生さんたちと接する機会はあまり多くはありません。しかし、専攻・学科内での話題が「いかに多くの（優秀な）学生を集めるか」「学生の学習意欲を高めるにはどのように授業を進めるべきか」等々に集中することに接しますと、やはり大学の主役は「学生」であり、我々スタッフの本分は（研究）教育であると自覚する次第です。「分子科学を担う次世代を育てたい」と考えたからこそ大学に戻った訳ですが、分子研で身についた「文化（カルチャー）」を後進にどのように伝えていくべきか、試行錯誤が続くだろうと自戒しています。まあ、まず何よりも、場所は変われど今後も **science** を楽しみたいと思っています。願わくば、その姿が若者たちを **encourage** するものでありますことを！

